

## AAALA NEWS

Asian American Literature Association, Japan  
December 2022 No.61

2019年以來、3年ぶりにAAALAフォーラムが対面で開催されました。記念すべき30回目のフォーラムに相応しく、講演、ミニ・シンポジウム、シンポジウムと盛りだくさんの1日でしたが、AAALAらしく最後まで活気のあるフォーラムになりました。このAAALA News 第61号では、フォーラムの報告および小池理恵氏と加藤麻衣子氏による参加記を掲載しておりますので、ぜひじっくりとお読みください。

さて、2023年度からはAAALA役員の役割に変化があります。特筆すべきは、古木圭子氏と牧野理英氏両名の副会長就任です。また、事務局長として渡邊が、事務局長補佐として新たに松本ユキ氏が就任します。その他詳しくは「総会報告」をご覧ください。

(文責：渡邊真理香)

### 第30回 AAALA フォーラム

アジア系アメリカ文学研究とトランスボーダー性／オリエンタリズム  
——村上春樹と小野姉妹を中心に

#### <プログラム>

日時：2022年9月25日(日) 9:50～16:40

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 11号館 4階第4会議室

9:30～9:50 受付

9:50～10:00 開会の辞 山本秀行 (AAALA 会長：神戸大学)

10:00～12:00

講演「副業としての翻訳家：村上春樹から始まった20年を振り返って」

講師：辛島デイヴィッド (早稲田大学) 司会：麻生享志 (早稲田大学)

ミニ・シンポジウム「トランスボーダー文学としての村上春樹」

講師：

仁平千香子 (山口大学) 「国境を越えた共感：村上春樹の国際的人気の理由を考える」

山本秀行 (神戸大学) 「村上春樹「ドライブ・マイ・カー」とその映画版におけるインタ

ーテクスト的トランスボーダー性」

12:00～13:30 昼休み

13:30～16:00

シンポジウム「アジア系アメリカ文学とオリエンタリズム——小野姉妹の功績を中心に」

司会：牧野理英（日本大学）

講師：

牧野理英（日本大学）「小野節子とオリエンタリズム」

田ノ口誠悟（日本学術振興会特別研究員 PD）「小野節子とピエール・ロティ」

矢口裕子（新潟国際情報大学）「オノ・ヨーコのオリエンタリスト／フェミニスト・パフォーマンス」

松川祐子（成城大学）「Palimpsest としての *The Yoko Ono Project*」

16:00～16:30 総会

16:30～16:40 閉会の辞

### 講演「副業としての翻訳家：村上春樹から始まった 20 年を振り返って」

[講演者紹介] 辛島 デイヴィッド (David Karashima) 先生

1979 年東京都生まれ。作家・翻訳家。現在、早稲田大学国際教養学部准教授。タフツ大学 (米) で学士号 (国際関係)、ミドルセックス大学 (英) で修士号 (文芸創作)、ロビライ・ビルヒリ大学 (西) で博士号 (翻訳・異文化学) 取得。日本文学の英訳や国際的な出版・文芸交流プロジェクトに幅広く携わる。2016 年 4 月から 2017 年 3 月まで、NHK ラジオ「英語で読む村上春樹」講師もつとめた。主な著作として、『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいる者たち』(みすず書房、2018)、『文芸ピープルー「好き」を仕事にする人々』(講談社、2021)、「インターセクションズ」(『すばる』2022 年 5 月号掲載) などがある。

[報告]

講演者である辛島デイヴィッド先生から、日本文学研究者としての教育研究活動の傍ら、「副業」として 20 年前から日本文学の英語翻訳に関わった実体験を元に、村上春樹をはじめ日本文学の英語圏での受容という点から非常に興味深いお話をいただきました。こうした視点は、私のようなアメリカ文学者が、アメリカ文学翻訳家として村上春樹をどのように評価していくべきかを考える上で非常に有益でした。辛島先生におかれましては、早稲田大学国際文学館 (村上春樹ライブラリー) の副館長という要職にありご多忙中にもかかわらず、ミニ・シンポジウムにも参加していただいただけでなく、午前の部終了後、フォーラム参加の訪問希望者を国際文学館にお招きいただきましたことに心より御礼申し上げます。

(文責：山本秀行)

## ミニ・シンポジウム「トランスボーダー文学としての村上春樹」

### [ミニ・シンポジウム概要]

本ミニ・シンポジウムでは、村上春樹研究の著書や論文を出版されている辛島デイヴィッド先生を囲んで、2名の発表者（山本および仁平先生）が「トランスボーダー文学としての村上春樹」という観点から、それぞれの観点・テーマから発表を行う。その後辛島先生からコメントや質問をいただいた後、フロアの会員の方々も交え、ラウンドテーブル・ディスカッションを行う。村上春樹の母校であり、また、2021年10月に国際文学館（村上春樹ライブラリー）が開館したことが話題になった早稲田大学において開催される本ミニ・シンポジウムで、「トランスボーダー文学としての村上春樹」という新たな姿を浮かびあがらせることができれば幸いである。（山本秀行）

### [ミニ・シンポジウム発表要旨]

#### 1. 「国境を越えた共感：村上春樹の国際的人気の理由を考える」

仁平千香子（山口大学）

村上春樹は国内外で多くの読者を獲得してきたが、国内の文学研究者や文芸評論家からの意見はデビュー当時から変わらず厳しい。ファンタジー要素が強いことや日本の社会問題や歴史に直接切り込まないスタイルは、逃避的と批判されたり、作者の日本人としての意識の希薄さと判断されたりしてきた。これらの批判的意見の背後には、「理想的な（純）文学のあり方」というある種の定型が固定化され共有されていると考えられるが、一方で読者の根強い人気は否定できるものではなく、また見過ごすべきでもない。また日本文学の海外受容に関して言えば、谷崎や三島、川端の読者はいわゆる「伝統的日本」を求めてこれらの作品を読む傾向があったのに対し、村上の読者は日本について知ろうと村上作品を読むことはない。そこには文化的差異を越えた共感があり、それが読者とある種の化学反応を起こしていると考えの方が自然である。本発表では、文化的特殊性や時代的特殊性を越えて読者に訴える村上作品の特徴について考えたい。

#### 2. 「村上春樹「ドライブ・マイ・カー」とその映画版におけるインターテクスト的トランスボーダー性」

山本秀行（神戸大学）

濱口竜介監督の映画『ドライブ・マイ・カー』（2021）は、2021年度アカデミー賞国際長編映画賞を受賞するなど、世界的な高評価を受けた。原作である村上春樹の同名の短編（2013年初出）のタイトルはThe Beatlesの曲“Drive My Car”(1965)に由来し、主人公の名前の家福（Kafuku）は2002年の小説『海辺のカフカ』の主人公の名前、あるいはその由来となっているFranz Kafkaを想起させるなど、他作品とのインターテクスト性によって、本作品のトランスボーダー性が補強されている。妻を亡くしたベテラン俳優の主人公家福が、愛車Saabの運転手として雇った無口で影のある若い女性みさきとの交流を通して人生の意味を模索するというメイン・プロットに、アントン・チェーホフの戯曲『ワ

『一ニヤ伯父さん』の韓国人製作者による多言語上演に主人公が監督（兼俳優）として関わり成功させるというインターテキスト的サブ・プロットが加わった映画版では、世界的アピール力を備えたトランスボーダー性がより顕著である。本発表では、こうした原作短編と映画版におけるインターテキスト的トランスボーダー性について詳細に検討したい。

## シンポジウム「アジア系アメリカ文学とオリエンタリズム——小野姉妹の功績を中心に」 [シンポジウム概要]

本シンポジウムの主旨は、第二次世界大戦前後に日本に生まれ、その後国家的概念から大きく逸脱して世界をかけめぐることになる小野姉妹—オノ・ヨーコ、そして小野節子—の60年代、70年代の功績に着目し、彼らのオリエンタリズムに対する視点がいかにアジア系アメリカという領域を再定義していたのかという問題を議論するというものである。

オノ・ヨーコとは、反戦運動や、Nutopia 設立といったトランスボーダーな平和主義を前面に掲げ、常に英米社会を挑発し続けた日本出身の前衛芸術家である。1969年にジョン・レノンとセンセーショナルな形で結婚式を挙げたことから、ともすれば「レノンの妻」という立ち位置ばかりが注目されがちであるが、実際には日本にいた頃から、斬新な芸術的手法と大胆なる行動力をもって活動し続けた人物である。ちなみに日系アメリカ作家カレン・テイ・ヤマシタは最新作『三世と多感 (*Sansei and Sensibility*)』(2020) 所収の短編「ボルヘスとわたし (“Borges and I”）」において、オノ・ヨーコとレノンの相互的かつ対等なる関係性を描いている。

一方小野節子という名前からオノ・ヨーコの妹という血縁関係を見出すことのできる人間はいないだろう。この人物の背景を見てみると、そこには太平洋戦争とともに生まれ、その後芸術と経済といった相異なる分野を極め、全世界を駆け巡った類まれなる国際人の姿をみることができるからだ。その人生には芸術家と起業家の接点ともいえるダイナミックな創造力が顕在化されている。70年代にスイスのジュネーブ大学大学院で執筆した博士論文には、オリエンタリズムという概念に正面から切り込み、そこから新たな視点を見出していた小野の慧眼が伺える。

本シンポジウムでは、田ノ口氏、矢口氏、そして松川氏の論考をベースに、オノ・ヨーコと小野節子の類稀なる才能が、オリエンタリズムというテーマを軸にどのように展開していったのかを分析していきたい。

(牧野理英)

## [シンポジウム発表要旨]

### 1. 「小野節子とオリエンタリズム」

牧野理英（日本大学）

小野節子の人生とその博士論文が示すのは、オリエンタリズムという概念に対し真正面から取り組んだ日本人の研究者としての姿勢である。1941年、銀行家の小野英輔・磯子夫妻の次女として東京に生まれ、両親とともに5年間アメリカで生活したのち、60年代後半

にはスイス・ジュネーブ大学附属高等国際問題研究大学院比較文学科に入学した小野は、72年にはこの博論を書き終える。この40年代生まれで70年代に活動を始める日本人の姿に筆者が注目している理由とは、激動の日本と共に生き、その国家性を国内のみではなくトランスナショナルな視点からとらえ、世界に発信するといった離れ業を70年代にスイスでやってのけたという点にあるだろう。国民意識に関して、そこで生まれ育った民族が特権をもって語るという形式に終始していたアメリカのエスニック文学が公民権運動から70年代にかけて注目されていた時代に、それをはるかに超越した形で、日本が欧米でどのように見られていたのかを逆の視点から追求していたのが小野節子であった。

ピエール・ロティ (Pierre Loti) とラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) の展開する日本論とは、それぞれ現代では日本研究およびオリエンタリズム研究において重要な文献であることはいまでもないが、70年代初頭にこれを比較し、両作家の視点の限界を指摘することで、徳川政権の徳川慶喜の体現する姿に新しい日本人像を見出したのはおそらくこの小野がはじめてであったと思われる。ここではこの博士論文を概観すると共に、筆者がこの論文を翻訳する上で感じた感想も交えながら、このエドワード・サイード (Edward Said) に先んじる小野のオリエンタリズム再考を、ラフカディオ・ハーンを起点に試みたいと思う。

## 2. 「小野節子とピエール・ロティ」

田ノ口誠悟 (日本学術振興会特別研究員 PD)

ピエール・ロティ (Pierre Loti, 1850-1923) は近代フランスの小説家、海軍士官であり、オペラ『蝶々夫人』の原作ともなった『お菊さん』(1887) など、自身の航海における異国の人々との交流をもとにした異国趣味的・エキゾティックな作品で広く知られている。しかしフランス文学においては、彼の作品はどちらかというと見聞録、旅行記に類するものとして扱われがちであり、その文学作品としての特色を真正面から考察する研究は多くないと言える。この点で、小野節子が1972年にジュネーブ大学大学院比較文学科に提出した博士論文『日本に対する西洋のイメージ：ロティとハーンを通して西洋人は何を見たのか』の意義は極めて大きかった。小野はそこで、『お菊さん』を始めとするロティの日本を主題とした作品を分析し、それらが「イメージ」という能動的な想像／創造の営為の所産であったことを示しているのである。本発表では、小野の分析を整理しつつ、その上でロティ作『お菊さん』を読解し、その独自のイメージの文学としての特性を明らかにする。その中で、ロティ作品の文学史的意義はもちろん、近年の文学研究においては単純な文化的偏見の具現として敬遠されがちな異国趣味文学やオリエンタリズム的作品を再評価する道筋も見えてくるだろう。

## 3. 「オノ・ヨーコのオリエンタリスト／フェミニスト・パフォーマンス」

矢口裕子 (新潟国際情報大学)

パフォーマンス・アーティストとしてのオノ・ヨーコの出発点を、仮に1955年の

*Lighting Piece* に置くなら、そのちょうど 60 年後の 2015 年、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) で行われた個展、*Yoko Ono: One Woman Show, 1960-71* が初期作品を集中的に取りあげたのは、故なきことではない。第一に、それがまさに 1971 年、MoMA を想像上の会場として開催された架空の展覧会、*One Woman Show* への、MoMA からの 44 年後の応答であったこと、第二に、何よりもまずジョン・レノン夫人としてオノを認識する世界に対して、レノン以前の前衛アーティスト、オノを提示すること、第三に、21 世紀時点から見ても、初期作品にこそオノの可能性の中心があると考えられるためではないか。

本発表では、玉虫厨子の捨身飼虎図にインスピレーションを受けたとされる、オノの代表的パフォーマンス作品 *Cut Piece* (1964) を、オリエンタリズムとフェミニズムの交差点に立ちあがるものと捉え、フランス人アーティスト、ニキ・ド・サンファルの *Shooting* (1961) と比較するとともに、3/11 以降バトラーが展開する新しい肉体の存在論、抵抗としての被傷性の議論に接続する。さらに、2021 年、ディズニー+で配信が開始された、解散間際のビートルズのドキュメンタリー映像 *Get Back* に映しだされるオノの姿を、無作為の作為、沈黙のノイズ、可視と不可視のあわいを揺れ動く抵抗のパフォーマンスと捉え、それがあつた幼い娘を「叫ぶ少女」に変容させるまでを追う。

#### 4. 「Palimpsest としての *The Yoko Ono Project*」

松川祐子 (成城大学)

アジア系北アメリカの文学と文化におけるオノ・ヨーコの影響力は計り知れないが、オノ・ヨーコが女性として、そして芸術家として、登場人物たちに大きな刺激を与えるアジア系北アメリカ文学作品をひとつ挙げるなら、韓国系劇作家ジーン・ユン (Jean Yoon, 1962-) の *The Yoko Ono Project* (2000) を選びたい。カナダを拠点に女優としても活躍するユンは、この作品にオノ・ヨーコ自身の作品を多数組み込み、マルチメディア戯曲として完成させた。オノ・ヨーコの展覧会で出会う主人公のアジア系女性たち 3 人は、いくつものオノ作品を体験しながらアジア系北アメリカ人女性としてのアイデンティティとオノ・ヨーコとの複雑な関係について語り始める。

本発表では、*The Yoko Ono Project* でのオノ作品、オノ作品を体験する主人公たちとキャスト、主人公たちの追体験をしながら芝居に参加する観客、そして *The Yoko Ono Project* 全体を鑑賞する観客や読者からなるパルンブセスト的重層性に着目する。可視化されたこれらの層でユンがオノの作品に重ねる現代アジア系北アメリカのコンテクストを通して、オノの先駆的ヴィジョンとユンの描くアジア系女性像と現代社会批判について探る。

#### <フォーラム参加記>

第 30 回の節目にあたる本フォーラムは、COVID19 パンデミックにより日々のありように変化が生じて 3 年、閉ざされた対面開催のドアを再び開くという意義深い場となった。偶然の連鎖により早稲田大学・国際文学館 (村上春樹ライブラリー) ツアーも実施された。

しかも、フォーラム前日に副館長に就任されたばかりという辛島デイヴィッド先生自らが案内役をしてくださるといふ豪華な特典付きでもあった。

フォーラムの前半は、村上春樹研究で多数の業績をお持ちの辛島先生が「副業としての翻訳家：村上春樹から始まった20年を振り返って」の経験をお話し下さった。創作者であり研究者でもある先生が、翻訳家は副業としつつも、その熱意と完成度の高さをもって取り組まれていることを改めて知る機会となった。その後、仁平千香子先生は「国境を超えた共感：村上春樹の国際的人気の理由を考える」と題し、日本国内ではその評価が分かれるものの、文化的な差異を独特の軽やかさで飛び越えてみせる普遍性を持ったグローバル作家として評価される理由について考察された。続いて山本秀行先生は、カンヌ国際映画祭での四冠をはじめアカデミー賞国際長編映画賞など海外での評価が非常に高い『ドライブ・マイ・カー』（濱口竜介監督・2021）の原作者としての村上春樹に注目しつつ、原作と映画のトランスボーダー性を際立たせる仕組みとしてチェーホフの戯曲がインターテキスト的サブ・プロットとして機能することを検証された。『村上春樹とポストモダン・ジャパン』で故三浦玲一先生が、日本と翻訳された国々とは「どちらが村上をより正確に評価しているといえるのであろうか」という問いに、少なくとも本フォーラム参加した後には、答えることができるのではないだろうか。

フォーラム後半は、小野姉妹の登場である。ここでも筆者がいかに流れゆく風景のすべてを注視してこなかったかを自省することとなった。それは、ヨーコ・オノはジョン・レノンのつれあいという肩書をトランスボーダーし、彼女自身の功績に目を向けずに来てしまったこと、更にはその妹である小野節子がオリエンタリズムの概念に真っ向勝負を挑んだ博士論文を提出して50年の年月が経っていたことを知らなかったことである。シンポジウムでは、牧野理英先生が「小野節子とラフカディオ・ハーン」、田ノ口誠悟先生が「小野節子とピエール・ロティ」を担当され、小野節子が当時両作家の日本研究の限界を指摘し徳川慶喜の日本人像を展開した研究者としての慧眼を私たちに証して下さった。またオノ・ヨーコに関して、矢口裕子先生がパフォーマンス・アーティストとしてレノン夫人以前に注目し、松川祐子先生が女性芸術家として影響を与えた韓国系劇作家ジーン・ユンの *The Yoko Ono Project* についてその影響を可視化して下さった。

「アジア系アメリカ文学研究とトランスボーダー性/オリエンタリズム—村上春樹と小野姉妹を中心に」というテーマで狭義のアジア系アメリカ文学というボーダーを超えて世界のムラカミと小野姉妹を深めるフォーラムに参加し、私はどこか抽象的ではあるが、自省の念に駆られた。それは、無謀にも「モーリシャスでムラカミの『蛭』を読む」実験をしたことを思い出したからである。フォーラムを前に私は3年ぶりに、8月の後半から9月にかけてインド洋の島嶼国モーリシャスを訪れた。英領時代にモーリシャスに出稼ぎに行った日本人のルートを探索するためである。インド系作家 Bharati Mukherjee の *Jasmine* によってモーリシャスが紹介されて以来、2000年から歩を重ねてきた。その間「モーリシャスでムラカミの『蛭』を読む」ことにも挑戦してしまったことがある。モーリシャスでもムラカミは人気でブックコートにはフランス語と英語のムラカミ作品が並んでいる。書

店によるとどちらの言語でも同じくらいの売れ行きだそうだ。

私は早稲田大学での AALA のフォーラムに来て、「トランスボーダー」という言葉を文字通りに実践するまで理解できていなかったことを思い知った。今回のフォーラムは研究交流の場に徹していながらも、どこかアトラクションにも似た感覚をもったのは私だけだろうか。

小池理恵（常葉大学）

九月末に早稲田大学で開催されたフォーラム「アジア系アメリカ文学研究とトランスボーダー性／オリエンタリズム——村上春樹と小野姉妹を中心に」に初めて出席させていただきました。AALA フォーラムには午前中のみでの参加でしたので、「副業としての翻訳家：村上春樹から始まった 20 年を振り返って」およびミニ・シンポジウム「トランスボーダー文学としての村上春樹」のみ述べさせていただきます。

AALA 会長山本秀行先生の開会の辞にて、シンポジウムの概要を説明していただいたのちに、最初に辛島デイヴィッド先生の「副業としての翻訳家：村上春樹から始まった 20 年を振り返って」にて、英語に翻訳された日本文学作品における村上作品の人気について、英語圏での出版状況の分析で展開される興味深いお話をうかがいました。

仁平千香子先生の「国境を越えた共感：村上春樹の国際的人気の理由を考える」では、外国の読者が日本文学作品に求める資質の変化について、国境を超える普遍性への傾倒が論じられました。二十世紀後半の日本文学といえば川端康成、三島由紀夫などの作品が「伝統的日本」のステレオタイプを求める読者に読まれるのに対して、村上春樹作品はそのような「伝統的日本」の要素とは違う、激変する現代社会に生きる人々が抱く喪失感、戸惑いといった普遍的な感覚を共有しようとする読者が好んでいる、という指摘に共感しました。そして西側諸国だけでなく旧ソ連、ポーランドなど旧共産圏での人気も高いという事実も、村上春樹作品がすでに「日本の」「アジアの」というカテゴリーを超えたところでの支持を受けている証しであると感じました。

山本先生の「村上春樹『ドライブ・マイ・カー』とその映画版におけるインターテクスト的トランスボーダー性」では、原作と映画版の両方における主人公の名前、メイン・プロット、映画版におけるサブ・プロットにおける様々な試みがトランスボーダー性をもって行われている随所の引用によって解説されました。作品のタイトルとビートルズの『ドライブ・マイ・カー』とのつながり、『海辺のカフカ』で家出を決意する主人公カフカと本作品の主人公の名前家福との類似性から、『グレート・ギャツビー』翻訳版と村上作品『女のいない男たち』がクロスオーバーする箇所、そしてメイン・プロットでの主人公家福と運転手として雇った女性みさきとの交流とサブ・プロットで登場するチェーホフ原作『ワーニャ伯父さん』とのつながりに至るまで、エンターテインメント性の中に緻密なトランスボーダー性が論じられていました。

私自身はまだ『ドライブ・マイ・カー』を観ていないのですが、こうした要素にも注目しながらぜひ観てみようと思いました。個人的には『ワーニャ伯父さん』を昔舞台で観て非

常に心を惹かれたので、村上作品とチェーホフとのつながりについても読んで確かめたいです。

加藤麻衣子(青山学院大学[非])

## 総会報告

### [2022年度 AALA 総会 議事録]

#### 1. 報告事項

##### (1) 2021年度(2021年4月1日～2022年3月31日)活動報告

- ①2022年3月例会のみウェブ開催。研究発表者および発表レジュメは AALA News No. 60 に掲載済み。
- ②新型コロナウイルス感染症のため、第29回 AALA フォーラムはウェブ開催となった。
- ③2021年12月31日付けで *AALA Journal* No.27 を発行。2021年度の AALA フォーラムを特集した。

##### (2) 2021年度会計報告

#### 2. 審議事項

##### (1) 2022年度(2022年4月1日～2023年3月31日)予算案

##### (2) 2023～2024年度役員を選出と役割分担

2023年度役員・役割分担(敬称略)

役員(50音順)

顧問: 植木照代

東京地区: 麻生享志、池野みさお、稲木妙子、河原崎やす子、小林富久子、  
寺澤由紀子、原恵理子、牧野理英

中部地区: 小林純子、長畑明利、村山瑞穂

関西地区: 荘中孝之、野崎京子、桧原美恵、深井美智子、古木圭子、松本ユキ、  
前田悦子、元山千歳、山本秀行

中四国・九州地区: 風早由佳、渡邊真理香 (計23名)

役割分担

会長: 山本秀行

副会長: 古木圭子 牧野理英

事務局: 渡邊真理香(事務局長、業務全般、ホームページ管理運営)

松本ユキ(事務局長補佐、例会案内・国内外広報)、

深井美智子(会計・名簿)

例会企画委員: 山本、古木、牧野、池野、渡邊、松本、村山、風早

\*例会企画担当者が発表候補者や企画提案（メール等で委員間で共有）  
なお、例会は基本的にはweb開催とする。

(3) 第31回 AALA フォーラム（2023年度）

開催場所：関西、神戸大学

開催日時：2023年9月16～17日 or 9月23～24日

総合テーマ：アジア系（アメリカ）文学と翻訳（仮題）

(4) 2022年～2023年の AALA 活動予定

①例会企画：2022年11月（Web開催予定）

2023年1月（Web開催予定）、3月（東京未定）、5月（未定）、7月（未定）、11月（未定） 発表希望者は随時募集。

②AALA Journal No. 28 担当：池野、渡邊、Preston、山本

2023年3月頃発行予定（編集代表池野より報告）

③AALA News No. 61 担当：渡邊 （HP掲載とML配信）

2022年12月末発行予定

④AALA News No. 62 担当：松本ユキ （HP掲載とML配信）

希望者には印刷したものを送付

2023年6月末発行予定、2022年度の例会発表者の報告と第31回 AALA フォーラム・プログラムの予告

(5) その他

①2024年度フォーラム 35周年フォーラムについて 企画準備委員会の設置  
(懸案事項)

\*会場 \*開催日程 \*テーマ

\*基調講演者などの国内外からのゲストスピーカーの決定

\*科研費、国際交流基金、アメリカ研究振興会などへの助成金申請

②今後の例会・フォーラム

③AALA Journal掲載事項の追加について

1) 役員体制、あるいは事務局体制を明記する。(2022年12月発行分より)

2) 掲載論文には英文 abstract を付ける。ただし、投稿規則の改訂が必要のため 2023年度発行分以降より実施（投稿規定改訂案・AALA ウェブサイトに掲載）。

④ 大学院生等の若手会員への支援策

1) 非会員でも例会発表可（1回のみ、ただし発表後に会員になるように勧誘）

2) AALA Journal の掲載料の減額（一般会員の半額程度）

**事務局だより**

<新入会員の紹介> (敬称略)

Mike Fu(早稲田大学[院]) ディッキー ソフィア ハナ(福岡女子大学[院]) 堀 江里香(再入会)

<会費納入のお願い>

いつも会員の皆様には、会費を納入いただきましてありがとうございます。*AAJA Journal* No.27 を送付の際に、振込用紙を同封させていただいております。もし、未納の方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

<住所等変更について>

住所、所属、メールアドレス等に変更がありましたら、ご面倒ですが、事務局名簿担当の深井氏までメールでお知らせいただきますようお願い申し上げます。

michifukai@hotmail.com

<*AAJA Journal*バックナンバー購入のお願い>

*AAJA Journal*バックナンバー(在庫僅少のNo.1を除く)を1部1,000円でお送りしています。会費納入の際に、ご希望の号と冊数を振込用紙の「通信欄」にお書きいただくと簡単です。

<ジャーナルの執筆者負担>

ジャーナルの投稿論文掲載には、従来から、執筆者負担をお願いしています。負担金額に応じてバックナンバーをお送りしています。今年度より「文献解題」や「書評」については「論文」の半額、学生会員については、各区分の規定額の半額となります。研究費・校費等で支払いを希望される場合は事務局にご相談ください。

☆会費・執筆者負担等の振込先は以下の通りです(振込料金は振込者負担となります)。

[ 郵便振替口座番号 01180-1-75183 加入者名 アジア系アメリカ文学会 ]

**アジア系アメリカ文学会**

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1  
神戸大学人文学研究科山本秀行研究室内  
TEL&FAX: 078-803-5543

AAJA NEWS No.61 2022年12月7日

編集担当: 渡邊真理香